茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第24集

石 沢 台 遺 跡 Ⅱ

市道3012号線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

平成 28 年 3 月

常陸大宮市教育委員会

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第24集

石沢台遺跡 Ⅱ

市道3012号線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

平成 28 年 3 月

常陸大宮市教育委員会

ごあいさつ

常陸大宮市は茨城県の北西部に位置し，県都水戸から北へ約20㎞の，平成の大合併で誕生した人口約４万２千人の市です。

市域は，鷲子山塊の南端と関東平野周縁台地の北端の境界部にあたります。東部には久慈川，南西部には那珂川，中央部には緒川や玉川の清流が流れ，山間には美林が涵養されていて，まさに山紫水明の地となっております。また，河川の流域や台地上には肥沃な田畑が広がり，大きな農業生産力の基盤となっております。

こうした豊かな自然に恵まれた常陸大宮市は，古くから人々の生活の場となり，多くの歴史を重ねております。そのため市域には，各時期の集落跡をはじめ，古墳・城館跡・塚など多くの遺跡が存在しているのです。

これらの遺跡は，私たちの祖先がどのように生活したのか，そして現在の豊かな生活の礎がいかに築かれてきたのかを知る手がかりになります。遺跡は，私たちが心豊かな生活をするうえで根源的かつ必要な情報を与えてくれていると言えましょう。この貴重な文化遺産を後世に伝えることは，私たちの大切な任務であり，郷土の発展のためにも重要なことと考えております。

今回の発掘調査は，平成27年８月18日から平成27年９月14日まで株式会社日本窯業史研究所に委託して実施したもので，奈良・平安時代から中世にわたる遺構・遺物が出土しました。玉川沿岸ではまだ発掘調査事例自体が少なく，資料の累積が十分とは言えない状況ですので，今回の発掘調査は，面積は小さいながらも貴重な成果と言えるでしょう。

本書は，この発掘調査の成果を報告するものです。歴史研究の学術資料としてはもとより，地域の教育・文化の向上のために十分に活用していただくことを希望いたします。また，この機会に文化財愛護の意識を一層高めていただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査にあたり御指導いただきました茨城県教育庁文化課，全般にわたり御協力いただきました地元の皆様，適正かつ慎重な調査をしていただいた株式会社日本窯業史研究所様，その他御指導・御協力をいただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

平成28年３月

茨城県常陸大宮市教育委員会
教育長　　上久保　洋一

例　言

1．本書は，茨城県常陸大宮市石沢字塙坂に所在する石沢台遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査は，常陸大宮市経済建設部都市建設課による市道3012号線道路改良に伴う事前調査として，発掘調査から整理・報告書刊行に至るまでの業務を同課より委託を受けて，常陸大宮市教育委員会の指導のもと，株式会社日本窯業史研究所が平成27年度に実施したものである。
3．本報告書の執筆・編集は，株式会社日本窯業史研究所　研究員　三輪孝幸が行った。ただし，第１章調査経緯第１節調査に至る経緯は，常陸大宮市教育委員会中林香澄によるものである。
4．発掘調査，資料整理及び報告書執筆にあたって，下記の諸氏･機関から御指導ならびに御協力を賜った。御芳名を記して感謝の意を表したい（敬称略）。
石沢区　大塚昇　笹沼光典　常陸大宮市経済建設部都市建設課　茨城県教育委員会　山下守昭
5．調査にかかわる図面・写真等の諸記録及び出土遺物は，常陸大宮市教育委員会が保管している。
6．発掘調査参加者は以下のとおりである。
井坂桂一　稲田桃子　久保木きよ子　栗原昌子　柴田忠良　関　律子　平根幸子　矢崎福司

凡　例

1．第２図は国土地理院発行２万５千分の１地形図『常陸大宮』を部分複製加筆した。
2．遺跡・遺構の略号は以下のとおりである。
石沢台遺跡：IZD　竪穴住居跡：SI　土坑：SK　溝：SD　柱穴：SP　カクラン：K　埋積土：X
確認面：XO
3．挿図の縮尺は，遺構が竪穴住居跡・土坑・溝１/60，柱穴１/80，遺物は１/３である。遺構番号は第１次調査に引き続き，連番とした。
4．挿図に示したドット，スクリーントーンは以下のとおりである。
土器●　鉄製品■　須恵器断面　黒色処理　粘土
5．遺構図面上の北の方位は座標北を示す，土層図，断面図の水準線は海抜標高を示す。その数字は市都市建設課より提供された測量データに基づいている。
6．遺物観察表の（　）は復元値，〔　〕は遺存高を示す。

目　次

ごあいさつ…… i
例言，凡例…… ii
目次，挿図目次，表目次…… iii
図版目次…… iv
第１章　調査経緯…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の経過…… 1
第２章　遺跡の位置と環境…… 3
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 3
第３章　調査の成果…… 6
　第１節　遺跡の概要…… 6
　第２節　層序…… 6
　第３節　遺構と遺物…… 8
　　1　竪穴住居跡…… 8
　　2　土坑…… 9
　　3　溝…… 16
　　4　ピット…… 18
　　5　遺構外出土遺物…… 20
第４章　総括…… 23
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　グリッド配置図…… 2
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 4
第３図　基本層序…… 6
第４図　遺構配置図…… 7
第５図　SI06実測図…… 8
第６図　SI07実測図…… 9
第７図　SI07出土遺物実測図…… 10
第８図　土坑実測図（１）…… 13
第９図　土坑実測図（２）…… 14
第10図　SD06 ～ 09実測図…… 17
第11図　SD10・11実測図…… 18
第12図　ピット詳細図…… 19
第13図　土坑・溝・ピット・遺構外出土遺物実測図…… 21

表目次

第１表　石沢台遺跡と周辺遺跡一覧…… 5
第２表　SI07 出土遺物観察表…… 11
第３表　ピット一覧表…… 20
第４表　土坑・溝・ピット・遺構外出土遺物観察表…… 22

図版目次

図版１　調査区全景（西から）　調査区中央部全景（東から）
図版２　基本層序（南から）　SI07（南から）　SI07 掘方（南から）　SI07 遺物出土状況，鎌（南から）　SK55（東から）　SK55 土層断面（東から）　SK56（南から）　SK58（南東から）
図版３　SK60・61・77（南から）　SK62・63（南から）　SK64（南から）　SK66（南から）　SK67（南から）　SK68（南から）　SK68 竪坑（北西から）　SK68 土層断面（東から）
図版４　SK71・72（南から）　SK74・75（南から）　SD06（東から）　SD07（南から）　SD08（東から）　SD10 土層断面（南西から）　SD10・11・SI06（西から）　SD10・11・SI06（南から）
図版５　SI07 出土遺物　土坑・溝・ピット・遺構外出土遺物（1）
図版６　土坑・溝・ピット・遺構外出土遺物（2）　墨書・刻書土器

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は，市道 3012 号線道路改良に伴う事前調査である。

平成 26 年 10 月７日，常陸大宮市長　三次　真一郎から常陸大宮市教育委員会に，市道改良予定地内における埋蔵文化財の所在の有無について照会が提出された。開発予定地は，周知の埋蔵文化財包蔵地石沢台遺跡内であった。

同年 12 月９日，市教育委員会生涯学習課　後藤　俊一が試掘調査を実施したところ，古代の竪穴住居跡，時期不明の土坑等が確認された。これに加え，市道改良という事業の性格から，工事の遂行には記録保存のための発掘調査が必要と考えられた。

この結果を受け，平成 27 年３月６日に茨城県教育委員会と協議を行ったところ，同年３月 17 日，茨城県教育委員会から，市教育委員会案のとおり発掘調査を実施すべき旨回答を受けた。

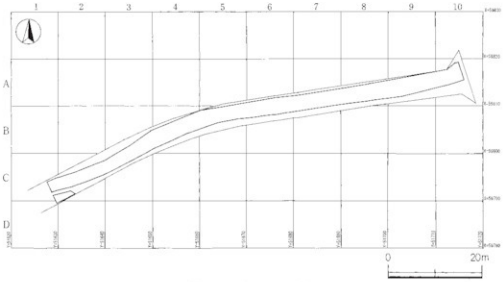
同年６月 19 日，常陸大宮市長　三次　真一郎は，株式会社日本窯業史研究所に発掘調査を委託した。同日，常陸大宮市・常陸大宮市教育委員会・株式会社日本窯業史研究所は常陸大宮市石沢台遺跡埋蔵文化財に関する協定書を締結して，同年８月 18 日から同年９月 14 日まで本調査を実施したものである。

なお，本発掘調査に先行して，石沢台遺跡では平成 24 年度に宅地造成事業に伴う発掘調査が行われており，奈良・平安時代の竪穴住居跡５軒等が確認された経緯がある。この調査成果は『石沢台遺跡　宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査』（茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 14 集）にまとめられている。

第２節　調査の経過

調査は平成 27 年８月 18 日から同年９月 14 日まで行った。調査範囲は現状の道路部分と買収部分を合わせた 508.19㎡を対象とし，現状では周囲のセットバックと水道管の埋設部分を除く 349.5㎡の調査を行った。

調査は東側を南北に通る道路から 92.6m を測り，調査区の西端とした。掘削作業はバックホーにより行い，ダンプにより場外に搬出した。８月 24 日に終了する。表土の掘削後，人力による遺構精査を行い，表土の掘削作業と並行して，確認した遺構の調査に入った。確認した遺構は確認状況図（１:200）を作成する。遺構の掘削は土層断面が観察できるようにセクションベルトを設定するか，あるいは調査区壁にて観察できる場合においては全体を掘削した。その後，土層断面図の作成，完掘，写真撮影，平面図作成を行った。ピットは半截し，土層の観察を行ったのち完掘した。遺構の掘削が終了した後，９月５日全景写真撮影を，調査区の東西側より撮影する。その後，基本層序確認のための試掘坑の掘削，SI07 の掘方掘削，平面図の作成を９月 14 日まで行って作業を終了し，15 日に借り埋め戻しと機材の撤収を行う。平面図は国家座標に基づいて，道路幅杭からグリッド杭を設定し，トータルステーションにより計測，方眼紙に手書きにより作図した。平面図は調査区を８分割して作図した。（１:20）写真は 35㎜白黒，リバーサルとデジタルカメラで撮影した。



第１図　グリッド配置図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

常陸大宮市は茨城県の北西部，県都水戸から 20kmの八溝山地及び阿武隈山地の南端と関東平野周縁台地北端の境界部に位置し，東に久慈川，南に那珂川，中央部に緒川，玉川が流れ，市の６割が山林で占められている。

市の東部には JR 水郡線と国道 118 号線が通り，中央には国道 293 号線，西部には国道 123 号線が通る。

本遺跡は市の南部，石沢地区に位置し，久慈川と玉川に挟まれた那珂台地の中位段丘面に立地している。本遺跡の立地する台地は北から南に向かって緩く傾斜し，西・南約 200m は玉川の形成する低地に向かって急峻な崖となっており，西側は南側から入り込む浅い谷が形成されている。調査地点の標高は 53m で，周囲は畑地となっている。

第２節　歴史的環境（第２図，第１表）

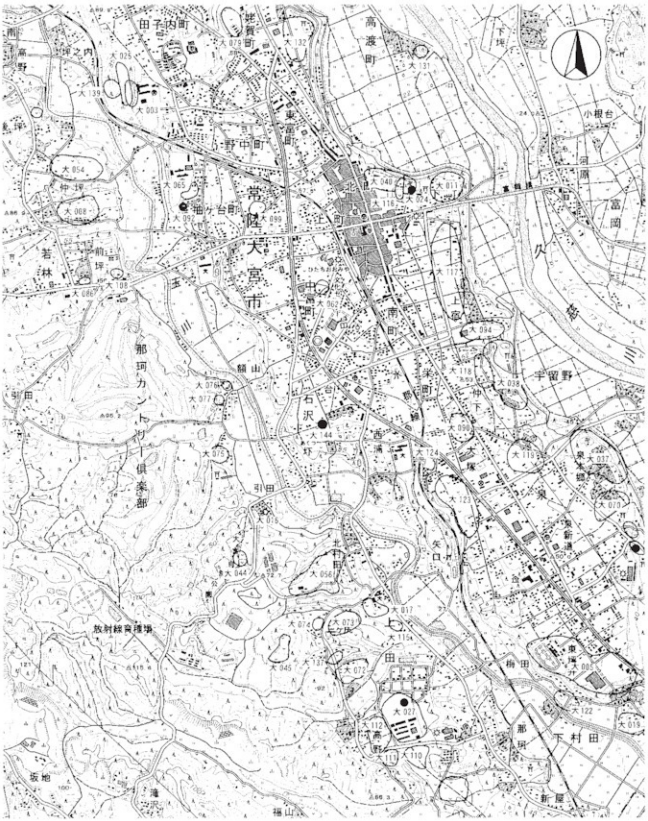
市内には旧石器時代から中近世にかけての数多くの遺跡があり，特に久慈川，玉川などの河岸段丘上に立地している。旧石器時代では現在までのところ７か所の遺跡が知られている。梶巾遺跡からは特に旧石器時代の尖頭器，石刃が出土しているが石核，剥片，尖頭器の在り方から石器を製造していたところと推定されている。

縄文時代は当市域においても遺跡の数が増えてくる。高ノ倉遺跡は縄文時代中期（阿玉台式，加曽利Ｅ式，大木式）が特区に多く認められる。坪井上遺跡（005）では竪穴建物跡 19 軒，土坑 75 基が検出され，多量の縄文土器や石器が出土している。上ノ宿遺跡（117）では，中期末から後期前半の集落跡が確認され，竪穴建物跡４軒，土坑 101 基が検出されている。小野天神前遺跡では晩期の土偶や亀形土製品をはじめ石剣，石棒，独鈷石等の祭祀具が多数出土している。

弥生時代では小野天神前遺跡や泉坂下遺跡が有名で，両遺跡からは人面付壺形土器を伴った再葬墓が検出されている。泉坂下遺跡では近年の調査により再葬墓が 21 基確認されている。このほか，富士山遺跡で後期の竪穴建物跡９軒と土壙墓３基，上ノ宿遺跡において後期竪穴状遺構３基が検出されている。

古墳時代は確認されている遺跡は多数あるが，調査されている遺跡は少ない。一騎山古墳群（027）は昭和 48 年に４基が調査された。１～３号墳は円墳で主体部が横穴式石室，４号墳は前方後円墳で主体部が粘土槨であった。土師器・須恵器，円筒埴輪，朝顔埴輪，人物埴輪，鉄鏃，直刀，ガラス小玉などの遺物が出土している。このほか，県内最古の古墳の一つとされる前方後円墳の富士山４号墳があり，また玉川左岸に岩欠横穴墓群（139），さらに約 500m 北方に市指定史跡である雷神山横穴群がある。集落跡では，梶巾遺跡では前・中期の竪穴建物跡が，下村田遺跡（現在は西坪井遺跡（019）に含まれる）では後期の竪穴建物跡７軒が確認されている。

古代において当地は，『和妙類聚抄』に記載されているところの常陸国久慈郡倭文郷に比定されている。当市においては古代の遺跡は 188 か所確認されている。上ノ宿遺跡では，８世紀前葉から 11 世紀中葉にかけて竪穴建物跡 124 軒，掘立柱建物跡 22 棟のほか円形有段遺構や土坑などが検出され，久慈川中流域の拠点集落と考えられている。鷹巣原Ｂ遺跡（082）は前後２回の調査において、奈良・平安時代の集落跡が確



144石沢台遺跡　003富士山遺跡　005坪井上遺跡　006陽平遺跡　011宮中遺跡　016引田前遺跡　017北村田遺跡　019西坪寺遺跡　024松吟寺古墳群　025富士権現古墳群　027一騎山古墳群　027前小原遺跡　030宇留野城跡　040武者城跡　044大宮自然公園遺跡　045京塚遺跡　054北平遺跡　056小中遺跡　062中富遺跡　065諏ヶ台遺跡　070春日神社前遺跡　072前三ヶ尻A遺跡　073後三ヶ尻A遺跡　074後三ヶ尻B遺跡　075熊の石遺跡　076鹿山A遺跡　077鹿山B遺跡　079姥賀遺跡　086前坪遺跡　090大塚遺跡　092諏ヶ台古墳　094上前上坪遺跡　099見渡遺跡　108前坪東遺跡　115北村田B遺跡　116松吟寺遺跡　117上ノ宿遺跡　118坪下遺跡　119馬木所遺跡　123上高作遺跡　124六丁遺跡　131高渡遺跡　132姥賀東遺跡　137前三ヶ尻B遺跡　139岩矢横穴墓群

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第１表　石沢台遺跡と周辺遺跡一覧

※番号の頭の「大」は旧・大宮町内であることを示す。

番号	遺跡名	種別	時代・時期	備考
大144	石沢台遺跡	集落跡	奈良・平安，中世・近世	H25一次調査
大003	富士山遺跡	集落跡	縄文	ほぼ湮滅
大005	坪井上遺跡	集落跡	縄文，弥生，古墳，奈良・平安	H5一次・H8二次調査
大008	関平遺跡	集落跡	縄文，古墳，奈良・平安	一部湮滅
大011	宮中遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安	H3一部調査
大016	引田前遺跡	集落跡	奈良・平安	
大017	北村田遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安，中世	
大019	西坪井遺跡	集落跡	弥生，古墳，奈良・平安，中世	H6一部調査
大024	松吟寺古墳群	古墳群	古墳	
大025	富士権現古墳群	古墳群	古墳	
大027	一騎山古墳群	古墳群	古墳	S48一部調査
大037	前小屋館跡	城館跡	奈良・平安，中世	H12測量調査
大038	宇留野城跡	城館跡	中世	
大040	部垂城跡	城館跡	中世	
大044	大宮自然公園遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安	
大045	萱峯遺跡	集落跡	縄文，古墳，奈良・平安	
大054	北平遺跡	集落跡	縄文，古墳，奈良・平安	
大056	小中遺跡	集落跡	奈良・平安	S52調査
大062	中富遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安	
大065	抽ヶ台遺跡	集落跡	古墳，奈良・平安	
大070	春日神社前遺跡	集落跡	古墳，奈良・平安	
大072	前三ヶ尻A遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安	
大073	後三ヶ尻A遺跡	集落跡	奈良・平安	
大074	後三ヶ尻B遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安，中世	
大075	熊の石遺跡	集落跡	奈良・平安	
大076	額山A遺跡	集落跡	奈良・平安	
大077	額山B遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安	
大079	姥賀遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安	H3調査
大086	前坪遺跡	集落跡	古墳，奈良・平安	
大090	大塚遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安	
大092	抽ヶ台古墳	古墳	古墳	
大094	上宿上坪遺跡	集落跡	縄文，古墳，奈良・平安，中世	H15調査
大099	見渡遺跡	集落跡	奈良・平安，中世	
大108	前坪東遺跡	集落跡	縄文，近世	
大115	北村田B遺跡	集落跡	奈良・平安，中世	
大116	松吟寺遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安，中世	部垂城跡の一部
大117	上ノ宿遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安，中世	H18・20・24・25・27調査
大118	仲下遺跡	集落跡	縄文，古墳，奈良・平安，中世	
大119	駄木所遺跡	集落跡	奈良・平安	
大123	上高作遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安	
大124	六丁遺跡	集落跡	奈良・平安	
大131	高渡遺跡	集落跡	縄文，奈良・平安	
大132	姥賀東遺跡	集落跡	古墳，奈良・平安	
大137	前三ヶ尻B遺跡	集落跡	奈良・平安	
大139	岩欠横穴墓群	集落跡	古墳	12基

認されている。特に住居跡かまどには瓦が使われ，周辺には瓦窯跡の存在が予想されていることから，本遺跡は工人集落である可能性が高い。中世においては，当地方は佐竹氏の支配下にあり，市内にも数多くの城館跡が残されており，近隣には小場城跡，前小屋館跡（037），宇留野城跡（038），部垂城跡（040）などが所在している。本遺跡でも，１次調査において粘土貼り土坑，土坑，溝跡，柱穴状遺構が確認されている。近世になると，佐竹氏の秋田移封に伴い当地は徳川御三家のうちの水戸藩領となり，現代につながる行政区が組織され，石沢村，静村，大宮町，常陸大宮市へと変遷する。

第３章　調査の成果

第１節　遺跡の概要

石沢台遺跡は，常陸大宮市の南部に位置し，中位段丘，玉川の左岸の標高 53m の台地上に立地している。遺跡の範囲は，台地の中央部から縁辺部にかけて広がり，調査区は，遺跡西部の台地中央部に位置している。

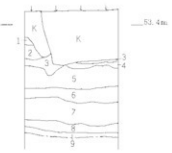
調査の結果，竪穴住居跡２軒（平安時代１，時期不明１），土坑 20 基，地下式坑２基，小穴 134 基，溝５条（中世２条，時期不明３条）を確認した。

遺物は遺物収納コンテナに２箱，出土している。主な遺物は土師器（坏・埦・高台付坏・蓋・皿・甕），須恵器（坏・蓋・高盤・甕），炻器（甕），陶磁器（碗・皿），鉄製品（釘・鎌・鉄滓）などである。

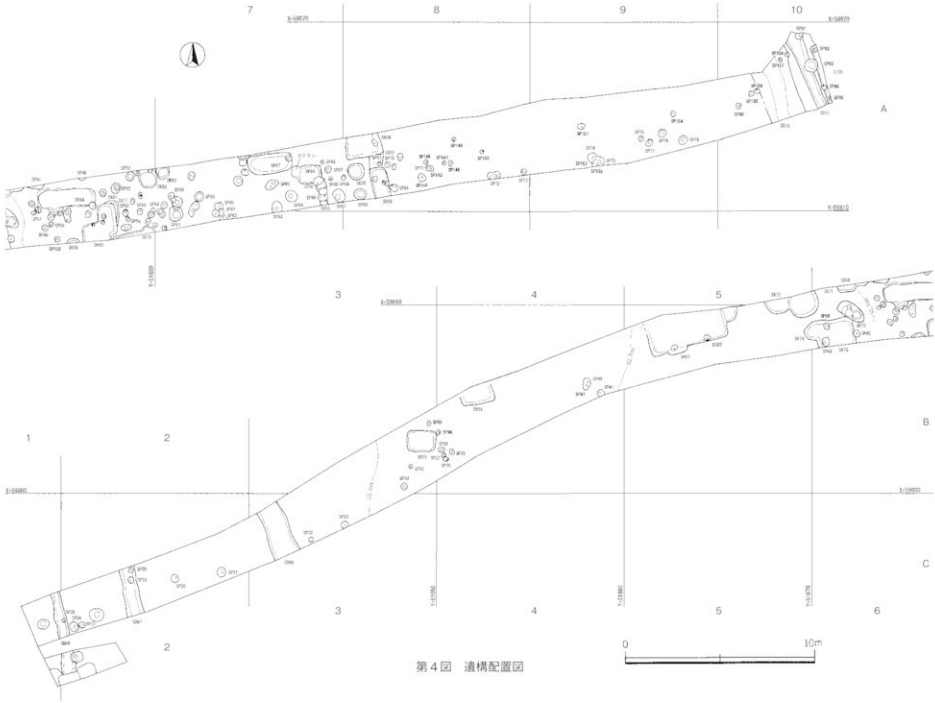
第２節　層序（第３図，図版２）

基本層序を確認するための試掘坑は遺構が密集し，また宅地が隣接する東部を避け，中央やや西寄りのＢ−4 グリッドに設定した。調査区の北側は牛蒡の耕作による攪乱が著しかったが，南側は調査区際を住民が通行しているため，危険を避け調査区北壁の壁面を利用し基本層序の確認を行った。

層位はＢ･Ｃ−１～４グリッドでは，耕作土直下にオレンジ色の軽石層が確認でき，これが遺構確認面となった。Ａ･Ｂ−５～10 グリッドでは，表土（耕作土）と軽石層の中間に黒色土層・ローム漸移層が確認され，ローム漸移層が遺構確認面である。軽石層の下層がローム層でいわゆる田原ローム層下部にあたり，試掘坑では 1.5m の厚さが認められた。その下部が，鹿沼軽石層（KP）で試掘坑はここまでの掘削に止めた。以下，図に示す。



第３図　基本層序



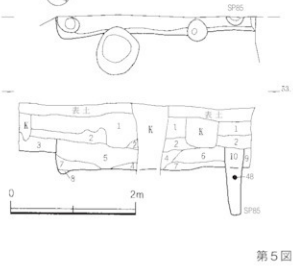
第４図　遺構配置図

第３節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

SI06（第５図，図版４）

本跡は調査区の東端Ａ－10グリッドに位置し，SP82～85に切られほとんどが調査区外に延びている。住居跡の西壁の一部を確認したにとどまった。主軸方向はＮ－15°－Ｗである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，深さは確認面から25cmである。壁溝は確認できなかった。床面はほぼ平坦である。柱穴は確認できなかった。埋積土は黒色土を主体とする。遺物は土師器・須恵器の細片がわずかに出土したのみである。



SI06
1黒褐色土10YR2/2　1～2mmローム粒5%含む。
2黒褐色土10YR2/2　締り弱い。1～2mmローム粒10%含む。
3黒色土10YR2/1　1～2mmローム粒3%含む。
4黒色土10YR2/1　締り弱い。5～10mmローム塊30%含む。
5黒色土10YR2/1　2～3mmローム粒20%，5mmローム塊3%含む。
6黒色土10YR2/2　1～2mmオレンジ粒20%含む。
7黒色土10YR2/1　締り弱い。
8黒褐色土10YR2/3　締り弱い。ローム粒20%含む。
9黒色土10YR2/1　締り弱い。1～2mmローム粒3%含む。
10黒褐色土10YR2/3　締り弱い。2～3mmローム粒20%，10mmローム塊50%含む。
（SP85）

第５図　SI06実測図

SI07（第６・７図，図版２・５）

本跡は調査区の中央Ｂ－５グリッドに位置し，SK57に切られ約半分が調査区外に延びている。平面形は長方形と推定され，規模は東西4.2mを測り，主軸方向はＮ－75°－Ｅである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，深さは41cmである。壁溝は認められなかった。床面はほぼ平坦で，中央が硬く締まっていた。掘方はローム層を掘りこみ中央部がローム土と白色粘土を，隅は黒色土とロームを混ぜて埋め戻され，床面から明瞭に観察できた。柱穴は南壁際に２基を確認しＰ１は径35cm，床面からの深さ76cm，Ｐ２は径33cm，床面からの深さ64cmである。いずれも柱痕跡は認められなかった。カマドは認められなかった。但し，東壁の外側には白色粘土が混じった黒色土の半円形の掘り込みが認められる。掘り込みには白色粘土塊が確認できたが，ほとんどが調査区外であった。白色粘土はカマド構築材と推測され，その場合には，半円形の掘り込みは住居壁外に延びる棚状施設の可能性がある。埋積土は黒色土の自然堆積である。

出土遺物は埋積土の下層より土師器坏・甕の破片を主体とする多数の破片が出土したが，個体は認められなかった。鉄製品鎌（21）・釘（20）は埋積土下層からの出土である。

遺物は土師器坏・高台付坏・皿・蓋・甕，須恵器坏・壺・甕，鉄製品釘・鎌が出土した。いずれも破片で，埋積土中から出土した。土師器坏（３）はＰ１から出土したものに，埋積土出土の破片が接合した。

土師器坏（１～３）・高台付坏（５）・皿（４・６～８）はロクロ整形，内面はミガキのち黒色処理されている。（４）は底部回転ヘラ削り，（５）は底部糸切り後，削り出し高台とする。皿（６）は体部外面に墨書が認められる。横書きの１文字であるが，判読不明である。蓋（９）は内外面にミガキが施され，内面は黒色処理

されている。須恵器坏（10）の体部外面に墨書が認められる。横書きの１文字であるが判読不明である。須恵器坏（11）の底部にヘラ記号が認められるが，破片のため全体はつかめない。土師器甕（12～16）はいわゆる常陸型甕で，外面がヘラ削りされる。須恵器壺（17）は良く焼き締まる。須恵器甕（19）は外面に平行叩きが施される。（20）は頭部を欠損するが，断面と先端の形状から釘と判断した。（21）は鎌で先端を欠損する。

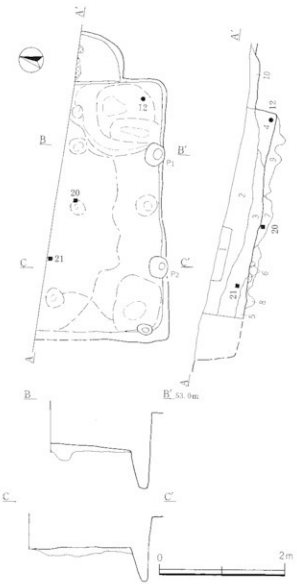
２　土坑

SK55（第８図，図版２）

本跡は調査区の西部Ｂ−３グリッドに位置する。平面形は長方形，規模は東西 1.5m，南北 1.2m を測る。主軸方向はＮ−１°−Ｅである。壁はやや内傾して立ち上がり，確認面からの深さ 70cmである。底面はほぼ平坦であるが，壁際が中央よりやや低くなっている。掘削の痕跡かとも思われる。埋積土は下層が黒色土を主体とし，上層はローム塊によって埋め戻されている。遺物は土師器細片８点，須恵器３点が出土したが実測し得ない。

SK56（第８図，図版２）

本跡は調査区の西部Ｂ−４グリッドに位置し，北側は撹乱に切られる。平面形は長方形と推定され，規模は東西 1.8m を測る。主軸方向はＮ−12°−Ｗである。壁は外傾して立ち上がり，確認面からの深さ 10cmである。底面はほぼ平坦。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は土師器甕２点，細片１点が出土したが実測し得ない。



SI07
1.黒色土10YR2/1　締り弱い。0.5～1mmローム粒3%含む。SK57覆土。
2.黒色土10YR2/1　やや締まる。1～3mmローム粒10%含む。
3.黒色土10YR2/1　やや締まる。1～4mmローム粒20%，焼土粒3%含む。
4.黒色土10YR2/1　やや締まる。2～3mmローム粒5%，3～4mmオレンジ粒3%含む。
5.黒色土10YR1.7/1　やや締まる。1～2mmローム粒3%含む。
6.黒色土10YR1.7/1　締り強い。3～5mmローム粒20%，10～30mmローム塊含む。
7.黒色土10YR2/1　5～10mmローム塊30%，5～10mm白色粘土20%含む。
8.ローム塊　黒色土混じる。
9.黒褐色土10YR2/2　5～10mmローム塊30%，オレンジ塊含む。
10.黒色土10YR2/1.7　締り弱い。10～30mm白色塊50%含む。

第６図　SI07 実測図

SK57（第８図）

本跡は調査区の中央西よりＢ−５グリッドに位置し，SI07 を切り調査区外にのびている。平面形は長方形と推定され，規模は東西 0.8m，南北 2.1m 以上を測る。主軸方向はＮ−８°−Ｗである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，確認面からの深さは 10cm，底面はほぼ平坦である。埋積土は黒色土を主体とする。遺物は出土していない。

第７図　SI07 出土遺物実測図

第２表　SI07出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	(13.8)	[4.9]	－	雲母・微砂粒	にぶい黄橙 10YR5/4	普通	ロクロ整形，体部外面回転ヘラ削り，内面横のミガキのち黒色処理。	確認面	
2	土師器	坏	(15.6)	[3.9]	－	雲母・微砂粒	橙7.5YR7/6	良	ロクロ整形，体部下端回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理。	堆積土	外面に粘土紐の痕跡。
3	土師器	坏	(10.0)	3.5	(6.0)	石英・雲母	橙7.5YR7/6	良好	ロクロ整形，体部下端回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理。底部ヘラ切り。	P1	底部に板状の圧痕。内面に粘状の油膜。
4	土師器	皿	－	[1.3]	(6.6)	石英・白色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	ロクロ整形，内面ミガキのち黒色処理。底部回転ヘラ削り。	確認面	
5	土師器	高台付坏	－	[1.3]	6.8	微砂粒	浅黄橙7.5YR8/6	良	ロクロ整形，内面ミガキのち黒色処理。底部糸切りのち削り出し高台。	堆積土	
6	土師器	皿	－	[2.3]	－	微砂粒	浅黄橙7.5YR8/4	良好	ロクロ整形，内面ミガキのち黒色処理。	確認面	外面に墨書。
7	土師器	皿	(12.2)	[1.7]	－	石英，やや粗い	にぶい黄橙 10YR5/3	良	ロクロ整形，内面ミガキのち黒色処理。	堆積土	
8	土師器	皿	(12.5)	[1.9]	－	石英・微砂粒	浅黄橙7.5YR8/6	普通	ロクロ整形，内面ミガキのち黒色処理。	堆積土	
9	土師器	壺	(15.7)	[1.9]	－	微砂粒	黒褐7.5YR3/2	普通	口縁部外面ミガキ，甲をヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理。	堆積土	
10	須恵器	坏	(14.6)	[3.4]	－	針状物質・2mm程	浅黄橙7.5YR8/4	二次被熱	ロクロ整形。	堆積土	体部外面に墨書。
11	須恵器	坏	－	[1.6]	(5.8)	針状物質・2mm程	にぶい黄橙 10YR7/3	二次被熱	ロクロ整形，底部糸切りのちヘラ削り。	№1	底部にヘラ記号。
12	土師器	甕	(19.2)	[7.8]	－	雲母・2－3mm程	橙2.5YR6/8	良	口縁部ヨコナデ，体部外面縦のヘラナデ，内面縦のヘラナデ。	№6	
13	土師器	甕	(21.9)	[7.7]	－	石英・粗砂粒	にぶい橙 7.5YR6/4	良	口縁部ヨコナデ，体部外面ヘラナデ，内面横のヘラナデ。	堆積土	口縁部内面に粘土紐の痕跡。
14	土師器	甕	(19.4)	[5.5]	－	石英・雲母・細砂粒	灰褐7.5YR4/2	普通	口縁部ヨコナデ，体部内面指ナデ。	確認面	
15	土師器	甕	(16.2)	[7.5]	－	石英・雲母・2mm程	にぶい赤褐 5YR5/4	良	口縁部ヨコナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。	確認面	
16	土師器	甕	－	[9.9]	－	石英・雲母・粗砂粒	にぶい赤褐 5YR5/4	良好	口縁部ヨコナデ，体部外面ヘラ削り。	堆積土	
17	須恵器	壺	－	[5.0]	－	針状物質	褐5.0/0	良好	ロクロ整形，外面自然降灰。	№2	
18	須恵器	甕	－	－	－	白色砂・5mm程	褐5.0/0	良好	ロクロ整形。	堆積土	
19	須恵器	甕	－	－	－	針状物質・粗	灰褐7.5YR4/2	良好	外面平行叩き。	確認面	

番号	種別	器種	長さ mm	幅	厚さ	重さ g	特徴	出土位置	備考
20	鉄製品	釘	81	7	5	10.3	頭部を欠損する。	№7	
21	鉄製品	鎌	135	38	2	61.4	先端を欠損する。	№3	

SK58（第９図，図版２）

本跡は調査区のほぼ中央Ａ－６グリッドに位置し，調査区外に延びているため全体を調査し得なかった。当初は土坑とピットと考えていたが調査区の壁際で結合し西壁が内傾することから，ピット部分を竪坑，土坑を室部とする地下式坑の可能性がある。規模は室部の幅が0.9mを測る。主軸方向はＮ－０°である。確認面からの深さ53cmである。埋積土は黒褐色土を主体とし，ローム粒が混じる。遺物は土師器坏２点，須恵器２点，細片３点が出土したが，実測し得なかった。

SK59（第８図）

本跡は調査区のほぼ中央Ｂ－６グリッドに位置し，調査区外に延びているため全体を調査し得なかった。平面形は円形かと思われる。壁はやや外傾して立ち上がり，確認面からの深さ33cmである。埋積土は黒褐色土を主体とし，ローム粒を含む。遺物は出土していない。

SK60（第８図，図版３）

本跡は調査区のほぼ中央Ｂ－６グリッドに位置し，SK61と重複し調査区外に延びている。平面形は方形と推定され，規模は東西1.4mを測る。主軸方向はＮ－４°－Ｗである。壁はやや外傾して立ち上がり，確認面からの深さ31cm，底面はほぼ平坦である。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は土師器甕１点，須恵器甕１点，陶器１点が出土したが，細片のため図化し得ない。

SK61（第８・13図，図版３・６）

本跡は調査区のほぼ中央Ａ・Ｂ−６グリッドに位置し，SK60・77と重複し切っている。平面形は長方形，規模は南北1.75m，東西0.9mを測る。主軸方向はＮ−５°−Ｗである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，確認面からの深さ27cmである。底面はほぼ平坦で，ピットが２基認められる。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は埋積土中位より，鉄滓が出土した。

遺物は羽口（56），鉄滓（54・55）が出土した。羽口（56）は破片で表面が一部確認できるに過ぎない。表面が熱により橙色と褐灰色に変色している。鉄は付着していない。遺存する厚さは2.4cmを測るが内側の孔は認められない。鉄滓は３点が出土し，２点を図示した。(54)は図の表面，全体の約１／３が黒褐色を呈し，鉄分とは考え難い。裏面はややくぼんでいる。羽口か，あるいは窯体のようなものが付着したものかと思われる。(55）は台形を呈し，図の表面はやや砂質で，裏面は凹凸が認められる。

SK62（第８図，図版３）

本跡は調査区の中央Ａ−６グリッドに位置する。牛蒡栽培による攪乱が著しく，調査区外にも延びているため，全体を調査し得なかったが，平面形は隅丸長方形と推測される。規模は東西0.9mを測る。壁はやや外傾して立ち上がり，確認面からの深さ19cmである。底面はほぼ平坦。埋積土は黒褐色土を主体とし，２層には炭化物・焼土を含んでいる。遺物は細片が出土したのみである。

SK63（第８図，図版３）

本跡は調査区の中央Ａ−７グリッドに位置し，SK62に隣接している。牛蒡栽培による攪乱が著しく，調査区外にも伸びているため全体を調査し得なかった。平面形は方形と推測される。規模は東西0.6mを測る。壁はやや外傾して立ち上がり，深さ20cm，底面はほぼ平坦である。埋積土は黒色土を主体とする。遺物は出土していない。

SK64（第８図，図版３）

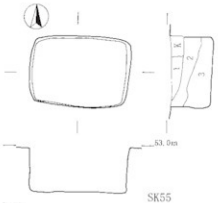
本跡は調査区の中央Ａ−７グリッドに位置し，SP66，北西隅を攪乱に切られる。平面形は長方形，規模は東西1.25m，南北0.95mを測る。主軸方向はＮ−７°−Ｗである。壁はやや外傾して立ち上がり，確認面からの深さ25cmである。底面はほぼ平坦。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は土師器甕細片が出土したが，実測し得ない。

SK65（第８図）

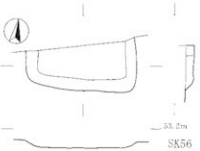
本跡は調査区の中央東寄りＡ−７グリッドに位置し，SP66・90・135・136と重複し切られ，調査区外に延びている。溝状を呈するも全体の形状は不明。規模は調査区南壁際で幅40cmを測る。主軸方向はＮ−11°−Ｗである。断面の形状は台形を呈し，深さ10cm，底面はほぼ平坦である。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。

SK66（第８・13図，図版３・６）

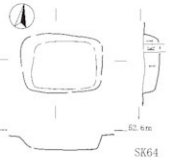
本跡は調査区の中央東寄りＡ−８グリッドに位置し，調査区外に延びている。平面形は長方形，規模は南北1.5m以上，東西0.8mを測る。主軸方向はＮ−９°−Ｗである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，確認面から



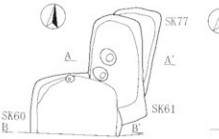
SK55
1黒褐色土10YR2/2　3～10mmローム塊5%含む。
2黒褐色土10YR2/2　10～20mmローム塊、5mmローム塊10%含む。
3 3～5mmローム塊　黒褐色土30%混じる。



SK56
1黒色土10YR2/1　締り弱い。0.5mmローム粒2%、植物根混じる。

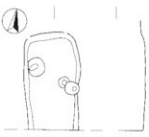


SK64
1黒色土10YR2/1　やや締まる。1～2mmローム粒1%含む。

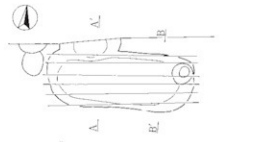


SK60
1黒褐色土10YR2/2　1～2mmローム粒20%、5～10mmオレンジ塊3%含む。
2黒色土10YR2/1　1～2mmローム粒10%含む。
3黒色土10YR2/1　やや締まる。3～5mmオレンジ塊30%含む。
4黒色土10YR2/1　やや締まる。3～8mmオレンジ塊20%含む。

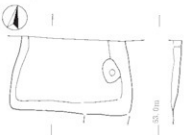
SK61・77
1黒褐色土10YR2/3　1～2mmローム粒3%含む。SK61埋積土。
2黒褐色土10YR2/3　2～3cmオレンジ塊3%、2～3mmローム粒10%含む。SK61埋積土。
3黒褐色土10YR2/3　2～3mmローム粒3%含む。SK77埋積土。



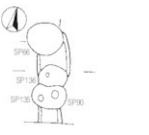
SK66
1黒褐色土10YR2/2　1～2mm白色粒2%、10～30mmオレンジ塊3%含む。



SK67
1黒褐色土10YR2/2　3～4mmローム粒5%含む。
2黒褐色土10YR2/2　0.5～1mmローム粒3%、3～4mmローム粒2%含む。
3黒褐色土10YR2/3　やや締まる。3～5mmローム塊3%含む。

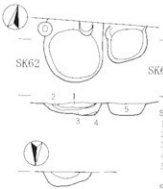


SK69
1黒褐色土10YR2/15　締り弱い。2～4mmローム塊3%含む。



SK65
1黒褐色土10YR2/2　2～3mmローム粒3%含む。
2黒褐色土10YR2/3　やや締まる。2～3mmローム粒5%含む。

SK57
1黒色土10YR2/1　締り弱い。0.5～1mmローム粒3%含む。

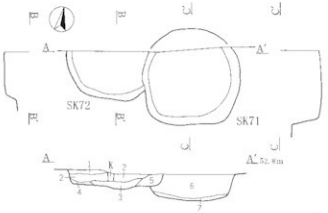


SK62・63
1黒褐色土10YR2/3　ローム粒3%含む。
2黒褐色土10YR2/3　炭化物・焼土含む。
3黒色土10YR2/1　2～3mmローム粒、1～2mmローム粒3%含む。
4ローム塊。以上SK62埋積土。
5黒褐色土10YR2/2　1～3mmローム塊10%、2～3mmローム粒3%含む。SK63埋積土。

SK59
1黒褐色土10YR2/2　やや締まる。
2黒色土10YR2/1　締り強い。1mm炭色粒5%含む。
3黒褐色土10YR2/15　やや締まる。1～2mmローム粒20%、10mmローム塊3%含む。
4黒色土10YR2/1　締り弱い。2～3mmローム粒30%、5cmオレンジ塊5%含む。

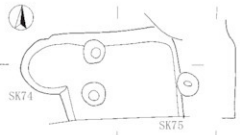
0　2m

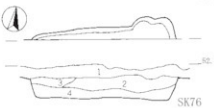
第８図　土坑実測図（１）



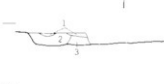
SK71・72
1 黒褐色土10YR2/2　縁作土
2 黒褐色土10YR2/2　1～2mmローム粒10%含む。
3 黒色土10YR2/1　締り強い。3～4mmローム粒5%含む。
4 黒色土10YR2/1　1～2mmローム粒10%、10～15mmローム塊3%含む。
5 黒色土10YR2/1　締り強い。1～2mmローム粒20%含む。
6 黒褐色土10YR2/3　締り強い。1～2mmローム粒30%、3～5mmローム塊3%含む。
7 黒色土10YR2/1　やや締まる。5～10mmローム塊3%含む。

SK70
1 黒褐色土10YR2/2　締り弱い。白色粒3%含む。





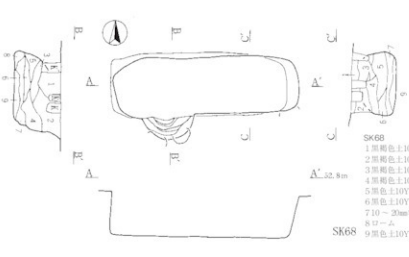
SK76
1 黒色土10YR2/1　締り強い。1mm黄色粒5%含む。
2 黒褐色土10YR2/2　やや締まる。0.5～1mmオレンジ粒20%、1～2cmオレンジ塊10%含む。
3 黒色土10YR2/1　1～2mm黄色粒10%、5mm黄色塊3%含む。
4 黒色土10YR2/1　やや締まる。2～3mm黄色粒5%、2～3cmオレンジ塊3%含む。



SK74・75
1 黒色土10YR2/1　締り弱い。5～10mm白色粒土塊3%含む。
2 黒色土10YR2/1　締り弱い。2～3cm黒褐色土塊混じる。
3 黒褐色土10YR2/2　締り弱い。3mmオレンジ粒5%含む。

SK58
1 黒褐色土10YR2/2　締り弱い。
2 黒褐色土10YR2/3　やや締まる。
3 黒褐色土10YR2/2　やや締まる。1～2mmローム粒5%、5～10mmローム塊含む。
4 黒褐色土10YR2/2　ローム塊混じる。
5 黒褐色土10YR2/1.5　やや締まる。
6 黒色土10YR2/1　2～3mmローム粒20%、10～20mmローム塊5%含む。
7 黒色土10YR2/1　10～20mmローム塊50%、2～3mmローム塊3%含む。

SK73
1 黒褐色土10YR2/3　締り弱い。20mmローム塊混じる。
2 黒色土10YR2/1　締り弱い。2～3mmローム粒5%含む。
3 黒褐色土10YR3/2　締り弱い。5～8mmローム塊混じる。
4 黒色土10YR2/1　1～2mmローム粒3%、50mmローム塊含む。
5 暗褐色土10YR3/3　10～30mmローム塊3%含む。



SK68
1 黒褐色土10YR2/3　1～2mmローム粒3%、5～10mmオレンジ塊含む。
2 黒褐色土10YR2/2　1～2mmローム粒30%、10～20mmオレンジ塊10%含む。
3 黒褐色土10YR2/2　2～3mmローム粒10%、20～30mmローム塊含む。
4 黒褐色土10YR2/2　2～3mmローム粒、10～20mmローム塊5%含む。
5 黒色土10YR2/1　3～10mmローム塊20%含む。
6 黒色土10YR2/1　2～3mmローム粒20%、10～20mmローム塊5%含む。
7 10～20mmローム塊、黒色土混じる。
8 ローム
9 黒色土10YR2/1　10～20mmローム塊10%含む。

0　2m

第９図　土坑実測図（２）

の深さ 19㎝を測る。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は土師器坏１点，甕２点，須恵器甕１点（39）不明１点が出土した。

（39）は須恵器甕の破片で，体部外面に平行叩き，内面に横のナデが施されている。

SK67（第８図，図版３）

本跡は調査区の中央Ａ−７グリッドに位置し，牛蒡栽培による攪乱が著しく，北西側に別な掘り込みを確認したが形状は不明である。平面形は楕円形と推測され，規模は東西 2.35m，南北 0.9m を測る。主軸方向はＮ−83°−Ｅである。壁はやや外傾して立ち上がり，確認面からの深さ 26㎝，底面はほぼ平坦である。埋積土は黒褐色土を主体とし，ローム粒を含む。遺物は出土していない。

SK68（第９・13図，図版３・６）

本跡は調査区の中央Ａ−６グリッドに位置している。南壁西寄りに竪坑をもつ地下式坑と考えられる。室部の規模は上面が東西 3m，南北 0.9m，底面が東西 2.85m，南北１ｍを測る。竪坑は奥行が 40㎝で，半円形を呈する。主軸方向はＮ−２°−Ｅである。壁は東壁を除き内彎し，確認面からの深さは 68㎝，底面はほぼ平坦である。竪坑はわずかに２段の階段状の遺構が認められる。埋積土は黒色土を主体とし，ローム塊が混じる。部分的に天井部の崩落土と考えられるロームが認められる。遺物は須恵器蓋（34）が出土した。

（34）は須恵器蓋の破片で，口縁部はやや内側に傾く。

SK69（第８図）

本跡は調査区の中央Ａ−８グリッドに位置し，調査区外に延びている。牛蒡の耕作による攪乱が著しく，遺構をしっかりと捉えることができなかった。確認した遺構の平面形は方形である。規模は東西２ｍを測る。壁は大きく外傾して立ち上がり，確認面からの深さ７㎝，底面はほぼ平坦である。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は細片が出土した。

SK70（第９図）

本跡は調査区の中央東寄りＡ−８グリッドに位置する。平面形は円形，規模は径 0.85m を測る。壁は外傾して立ち上がり，掘り込みが浅く確認面からの深さ５㎝である。遺物は出土しなかった。

SK71（第９・13図，図版４・６）

本跡は調査区の中央Ａ・Ｂ−５・６グリッドに位置し，SK72 に切られ調査区外に延びている。平面形は円形，規模は径 1.6m を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり，確認面からの深さ 45㎝，底面はほぼ平坦である。埋積土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は，須恵器坏（35），甕（38），土師器坏１点，甕４点，細片が出土した。

（35）は須恵器坏の破片で，ロクロ整形されている。（38）は須恵器甕の破片で，外面には平行叩きが施され，緑色の自然釉が付着している。

SK72（第９図，図版４）

本跡は調査区の中央Ａ・Ｂ−５グリッドに位置し，SK71 を切り調査区外に延びている。平面形は円形，規模は径 1.65m を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり，確認面からの深さ 26㎝，底面はほぼ平坦である。埋積

土は黒色土を主体とする。遺物は出土していない。

SK73（第９図）

本跡は調査区の中央Ａ・Ｂ−６グリッドに位置する。平面形は不正楕円形，規模は南北 1.6m，東西 0.75m を測る。壁は外傾して立ち上がり，確認面からの深さ 34㎝である。底面は凹凸があり平坦ではない。埋積土は黒色土を主体とする。遺物は出土していない。

SK74・75（第９図，図版４）

本跡は調査区の中央Ｂ−５・６グリッドに位置し，円形の SK74 と方形の SK75 の重複と考えた。SP44・45・98 に切られる。確認面では SK74 と SK75 の重複は確認できなかったことから，全体が SK74 を張り出し部とする方形竪穴とも考えられる。規模は SK75 の東西が２m を測る。SK75 の主軸方向は N−10°−W である。壁は外傾して立ち上がり，確認面からの深さ 13㎝である。底面は SK74・75 ともにレベルが同じで平坦である。埋積土は黒色土を主体とする。遺物は出土していない。

SK76（第９図）

本跡は調査区の中央Ｂ−６グリッドに位置し，調査区外に延びている。平面形は方形と推測され，規模は東西長 2.3m を測る。主軸方向は N−14°−W である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，確認面からの深さは 28㎝，底面はほぼ平坦である。埋積土は黒色土を主体とし，オレンジ粒が混じる。遺物は土師器細片が出土した。

SK77（第８図，図版３）

本跡は調査区のほぼ中央Ａ・Ｂ−６グリッドに位置し，SK61 に切られる。平面形は長方形と推定されるが，規模は計測できない。壁はほぼ垂直に立ち上がり，確認面からの深さ 10㎝である。底面はほぼ平坦。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。

３　溝

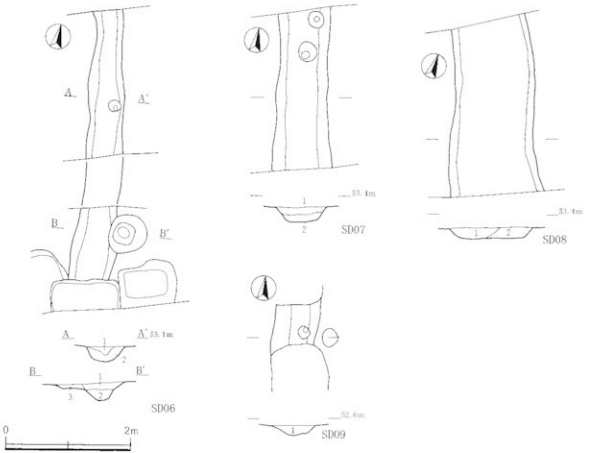
SD06（第 10 図，図版４〜６）

本跡は調査区の西端Ｃ・Ｄ−１・２グリッドに位置し，調査区を南北に通り遺構は調査区外に延びる。規模は 4.3m を確認し，上幅 0.6m，下幅 0.35m，確認面からの深さ 10㎝である。断面の形状はすり鉢状を呈する。主軸方向は N−14°−W である。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は土師器埦（26），炻器甕（43）のほか土師器甕などの細片が出土した。

（26）は土師器埦の破片で，体部外面下半回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理を施し，外面には二次被熱が認められる。（43）は炻器甕の破片で，内面に自然降灰が認められる。

SD07（第 10 図，図版４）

本跡は調査区の西端Ｃ−２グリッドに位置し，調査区を南北に通り，調査区外に延びている。規模は 2.5m を確認し，上幅 0.8m，下幅 0.5m，確認面からの深さ 22㎝である。断面の形状は台形を呈する。主軸方向は N−12°−W を測る。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は土師器坏４点，甕７点，不明９点，須恵器坏１点，蓋１点を出土したが，細片のため図化し得ない。



SD06 A-A'
1 黒褐色土10YR2/2　締り弱い。2～3mmローム粒5%含む。
2 黒褐色土10YR2/2　締り弱い。3～4mmローム粒5%，20mmオレンジ塊混じる。

SD06 B-B'
1 黒色土10YR2/1　締り強い。
2 黒褐色土10YR2/3　ローム粒30%，10mmローム塊5%含む。
3 黒褐色土10YR2/2　ローム粒3%含む。
植物根の痕跡

SD07
1 黒褐色土10YR2/2　締り弱い。上層にローム土混じる。
2 黒色土10YR2/1　締り強い。中央に2～3mmローム粒10%混じる。

SD08
1 黒褐色土10YR2/3　1～2mmローム粒3%，白色粒含む。
2 黒褐色土10YR2/3　白色粒含む。

SD09
1 黒褐色土10YR2/2　やや締まる。1～2mm白色粒3%，10～20mmオレンジ塊3%含む。

第10図　SD06～09実測図

SD08（第10図，図版4）

本跡は調査区の西端，C−3グリッドに位置し，調査区を南北に通り，調査区外に延びている。規模は2.7mを確認し，上幅1.35m，下幅1.1m，確認面から深さ21cmである。断面の形状は台形を呈する。主軸方向はN−20°−Wを測る。埋積土は黒褐色土を主体とする。遺物は土師器甕4点，細片7点，須恵器坏1点，陶器，不明鉄製品，メノウが出土したが，細片のため図化し得ない。

SD09（第10図）

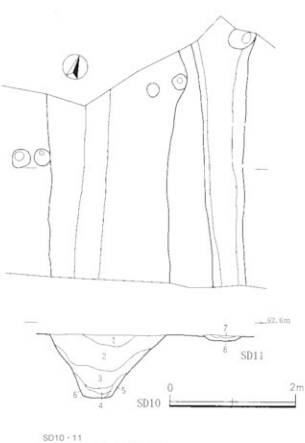
本跡は調査区の中央東寄りA−8グリッドに位置し，SK66・69，SP93と重複し全体を調査し得なかった。南北に通るものと推測される。規模は全長70cm，上幅70cm，下幅50cmを測る。主軸方向はN−8°−Wである。断面逆台形を呈し，確認面からの深さ5cm，底面はほぼ平坦である。埋積土は黒褐色土を主体とし，白色粒を含む。遺物は出土していない。

SD10（第11図，図版4）

本跡は調査区の東端A−10グリッドに位置し，調査区を南北に通り調査区外に延びている。規模は3.5mを確認し，上幅1.9m，下幅0.6mを測る。主軸方向はN−17°−Wである。断面の形状は箱薬研形を呈し，確認面からの深さ1mである。底面は北に向かってやや低くなる。埋積土は黒色土を主体とする自然堆積である。遺物は土師器坏7点，甕8点，細片12点，須恵器甕3点が出土したが，細片のため作図していない。

SD11（第11図，図版4）

本跡は調査区の東端A−10グリッドに位置し，調査区を南北に通り調査区外にのびている。西60cmにSD10が並行して通る。規模は4mを確認し，上幅50cm，下幅30cm，確認面からの深さ20cmである。断面の形状は台形を呈する。主軸方向はN−23°−Wを測る。埋積土は上層にローム土が堆積し，下層は黒褐色土である。確認面からの深さが浅いために，ローム土による埋め戻しかは判断できない。出土遺物は無し。



第11図　SD10・11実測図

4　ピット（第12・13図，図版5・6）

本調査区内から134基のピットを確認した。特に調査区の中央A・B−6・7グリッドに集中している。規模は径16～75cm，深さ10.4～78cmを測る。平均すると径20～30cmと35～40cmに纏まりが見えるが，50cm以上となるとばらばらである。埋積土は黒色土を主体とするものと，黒色土・黒褐色土にローム粒・塊を多く含んだものに大別できる。SP68には焼土が多量に含まれていたが，焼け面の痕跡は認められなかった。ピットは一か所に複数のものが重複する，いわゆる建物の建て替えを想定できるものもある。これらのことから，これらのピットは建物に伴うものと推測されるが，調査区が狭小なため建物を推定できなかった。遺物はSP26・30・31・37・40・41・43・46・50・53・54・56・57・60・64・67・69・70・71・74・81・86・87・90・91・93の埋積土中から，土師器坏・甕，須恵器坏・甕などの破片が出土した。特にSP67から纏まって出土し，鉄滓はSP94から7点，SP57から4点，SP55から1点が出土した。ピットは計測表の提示にとどめる。

(22)は土師器坏の破片で，SP69から出土した。体部外面回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理がなされる。(23)は土師器坏の破片で，SP67から出土した。体部外面回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理が施される。(24)は土師器坏の破片で，SP67から出土した。体部外面回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理が施される。(25)は土師器高台付坏の破片で，SP67から出土した。体部外面ロクロナデ，下端ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理がなされる。(27)は土師器皿の破片で，SP67から出土した。口縁部は肥厚し，体

第12図　ピット詳細図

部外面回転ヘラ削り，内面にはミガキのち黒色処理が施される。(28) は土師器皿の破片で，SP93 から出土した。外面下端削り，内面ミガキのち黒色処理が施される。(29) は土師器甕で SP57 より出土した。体部上位に最大径を持つものと推測され，外面に焼土が付着している。内面は指ナデがなされる。(30) は土師器甕で SP67 より出土した。頸部はくの字に折れ，短く立ち上がる。(31) は土師器甕で SP67 より出土した。頸部は外反し，口縁部は短く立ち上がる。体部外面はヘラ削り，内面には斜めナデがなされる。(32) は土師器甕で SP67 から出土した。(33) は土師器甕で SP40 から出土した。体部外面ミガキ，内面ナデ調整である。(37) は須恵器甕の破片で，SP41 から出土した。頸部は外反し，内面には自然降灰を認める。(48) は土器の鍋で SP85 より出土した。頸部は外反し，口縁部は短く立ち上がる。

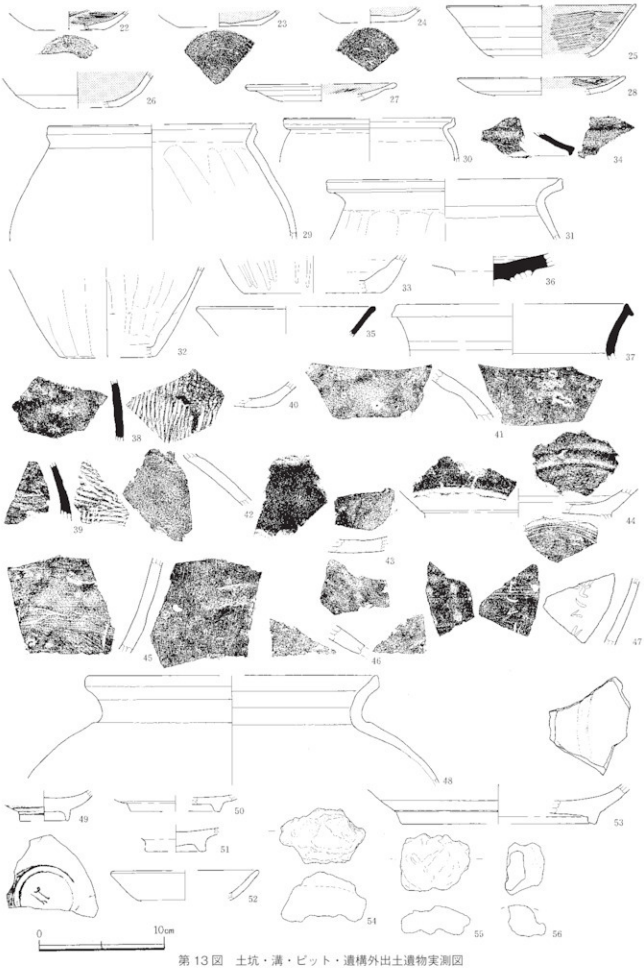
第３表　ピット一覧表

番号	グリッド	径	深さ	番号	グリッド	径	深さ	番号	グリッド	径	深さ	番号	グリッド	径	深さ
SP25	C2	19＊17	49.9	SP59	A7	53＊45	28.7	SP93	A8	20＊20		SP127	B7	28	49.6
SP26	C2	53＊50	33.5	SP60	A7	42＊36	27.4	SP94	B6	25＊25	34.3	SP128	B7	43＊35	51.2
SP27	C2	35＊35	11.6	SP61	B7	38＊27	44.6	SP95	B3	28＊23	33.8	SP129	A7	55＊50	24.2
SP28	C2	25＊25	35.8	SP62	B7	35＊23	30.7	SP96	B4	30＊20	25.9	SP130	A7	40＊31	65.1
SP29	C2	31＊30	57.5	SP63	A7	58＊52	66.7	SP97	B4	25	42.8	SP131	A7	40＊34	48.2
SP30	C2	46＊41	32.8	SP64	A7	59＊56	43.2	SP98	B6	40＊35	47.9	SP132	A7	(50)	46
SP31	C2	47＊46	32.1	SP65	A7	67＊45	79.1	SP99	A6	29＊26	29.4	SP133	A7	32＊30	59.3
SP32	C3	28＊26	34.6	SP66	A7	50＊35	63.8	SP100	B6	22＊21	17.4	SP134	A7	30	62.3
SP33	C3	39＊35	31.4	SP67	A7	68＊60	59.8	SP101	B6	25＊26	23.9	SP135	A7	36	63.5
SP34	B3	36＊34	91.1	SP68	A8	68＊55	10.4	SP102	B6	36＊25	15	SP136	A7	45＊35	32.2
SP35	B3	28＊26	40	SP69	A8	50＊40	38.8	SP103	B6	25＊25	45.9	SP137	A8	28＊25	23.3
SP36	B4	33＊20	20.6	SP70	A8	27＊25	31.7	SP104	B6	35	51.5	SP138	A8	16	22
SP37	B4	20＊19	10.8	SP71	A8	25	31.7	SP105	B6	30	40.8	SP139	A8	23＊21	34.2
SP38	B4	34＊23	10.5	SP72	A8	70＊35	48.9	SP106	B6	34＊33	60.9	SP140	A8	40	52.5
SP39	B4	35＊28	33.4	SP73	A8	33＊27	34.6	SP107	A6	35＊28	73.1	SP141	A8	35＊28	44.4
SP40	B4	40	54.8	SP74	A9	50	55	SP108	A6	38＊35	33.2	SP142	A8	40＊30	43.6
SP41	B4	37＊32	25.6	SP75	A9	55	68.6	SP109	A6	38	21.9	SP143	A8	36＊26	33.3
SP42	B5			SP76	A9	32＊25	27.9	SP110	A6	32＊25	38.7	SP144	A8	44＊44	23.8
SP43	B5			SP77	A9	46＊30	38.2	SP111	A6	24＊22	46.6	SP145	A8	25	41.7
SP44	B6	40＊36	73.2	SP78	A9	46＊40	42.4	SP112	A6	24	19.1	SP146	A8	25＊20	22.7
SP45	B6	40＊32	29.5	SP79	A9	47＊45	27.8	SP113	A6	23＊23	29.6	SP147	A8	20＊20	55.8
SP46				SP80	A10	30＊28	20.6	SP114	A6	21	55.2	SP148	A8	30＊27	34.3
SP47	A6	45	58	SP81	A10	46＊34	40	SP115	B6	53＊32	11.6	SP149	A8	20＊20	38
SP48				SP82	A10	38＊25	42.6	SP116	B6	26＊22	16.6	SP150	A8	20＊17	45.1
SP49	B6	33＊30	50.1	SP83	A10	73＊70	40.5	SP117	B6	38＊27	15	SP151	A9	40＊35	42.4
SP50	B6	43＊40	56.1	SP84	A10	35＊30	66.1	SP118	A7	35＊32	32.6	SP152	A9	50	58
SP51	A6	30＊27	28	SP85	A10	28	87.3	SP119	B7	32＊30	69.4	SP153	A9	50	64.2
SP52	A6	45＊42	24.9	SP86	A7	25＊20	62.8	SP120	B7	36	42.7	SP154	A9	30＊26	30.4
SP53	B6	35＊29	25.8	SP87	A7	39＊35	25.6	SP121	B7	25＊21	31.1	SP155	A10	28＊28	46.3
SP54	B6	26＊24	35.5	SP88	A7	30＊20	47.4	SP122	A7	25＊25	57.5	SP156	A10	27＊26	51.1
SP55	B6	28＊28	34.9	SP89	A7	23＊23	50	SP123	A7	28＊27	63.2	SP157	A10	20＊20	50.3
SP56	B6	30＊27	31.4	SP90	A7	57＊36	57.5	SP124	A7	63＊50	21.2	SP158	A10	27＊22	12.9
SP57	B7	75＊70	18	SP91	A6	(90)	75	SP125	A7	44＊34	78.2				
SP58	A7	27＊26	18.1	SP92	A6	27＊24	58.1	SP126	A7	40	23.9				

5　遺構外出土遺物（第13図，図版６）

表土掘削作業中に出土した遺物７点について図示した。

(36) はA–9グリッドより出土した須恵器高盤の破片で，脚部に透かしが認められる。(47) はA–8グリッドより出土した炻器の破片で，外面にヘラ書が認められる。３文字「□乙□」が書かれるが判読不明。(49) はB–6グリッドの表土より出土した磁器埦の破片で，白磁の胎土に呉須で描かれている。(50) はA–8グリッドの表土より出土した陶器皿の破片で，内面に灰釉が施される。(51) はB–4グリッドの表土より出土した陶器碗の破片で，黒色の釉薬。(52) はA–7グリッドより出土した緑釉陶器鉢の破片で，口縁部に灰釉が施される。(53) はA–9グリッドの表土より出土した陶器鉢の破片で，長石釉が施され鉄絵で曲線が描かれる。



第13図　土坑・溝・ピット・遺構外出土遺物実測図

第４表　土坑・溝・ピット・遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土師器	坏	－	(1.5)	(5.5)	石英・細砂粒	浅黄橙75YR8/3	普通	体部外面及び底部回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理。	SP69埋土	
23	土師器	坏	－	(1.2)	(6.5)	石英・長石・細砂粒	橙5YR7/6	普通	体部外面回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理。	SP82埋土	
24	土師器	坏	－	(1.1)	(5.4)	石英・微砂粒	浅黄橙75YR8/3	普通	体部外面回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理。	SP82埋土	
25	土師器	高台付坏	(15.0)	(4.3)	－	石英・細砂粒	浅黄橙75YR8/4	一部二次被熱	ロクロ整形，体部外面下端回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理。	SP82埋土	
26	土師器	椀	－	(2.9)	(6.7)	微砂粒	褐灰75YR4/1～にぶい黄橙10YR7/3	二次被熱	体部外面下端回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理。	SD06埋土	
27	土師器	皿	(11.8)	(1.4)	－	石英・微砂粒	にぶい橙7.5YR6/4	普通	口縁部ヨコナデ，体部外面回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理。	SP82埋土	
28	土師器	皿	(13.3)	(1.5)	－	石英・微砂粒	浅黄橙75YR8/6	普通	ロクロ整形，体部外面下端回転ヘラ削り，内面ミガキのち黒色処理。	SP83埋土	
29	土師器	甕	(16.6)	(9.4)	－	石英・細砂粒	橙7.5YR6/8	二次被熱	口縁部ヨコナデ，内面指ナデ。	SP57埋土	
30	土師器	甕	(13.5)	(3.5)	－	石英・細砂粒	にぶい赤褐5YR5/4	良好	口縁部ヨコナデ，体部内面ヘラナデ。	SP82埋土	
31	土師器	甕	(18.6)	(4.9)	－	石英・針状物質	にぶい赤褐5YR5/4	二次被熱	口縁部ヨコナデ，体部外面ヘラナデ，内面指ナデ。	SP82埋土	
32	土師器	甕	－	(7.3)	(8.0)	石英・雲母・礫	明赤褐5YR5/6	良好	体部外面ヘラナデ，内面縦の指ナデ。底部木葉痕。	SP82埋土	内面に粘土紐の痕跡。
33	土師器	甕	－	(3.0)	(11.0)	石英・雲母・3～4mm礫	浅黄橙75YR8/4	普通	体部外面ミガキ，内面ナデ。	SP69埋土	
34	須恵器	蓋	－	－	－	針状物質	灰N5/0	良好	ロクロ整形。	SK68埋土	
35	須恵器	坏	(14.3)	(2.5)	－		灰5Y5/1	良好	ロクロ整形。	SK71埋土	
36	須恵器	高盤	－	(2.3)	－	灰	灰黄褐10YR4/2	良好	ロクロ整形。	A-9グリッド	割れ口摩滅。
37	須恵器	甕	(18.2)	(4.5)	－	黒色粒・灰色	暗灰黄2.5Y4/2	良好	ロクロ整形，口縁部内面自然降灰。	SP61埋土	
38	須恵器	甕	－	－	－	灰・黒色粒	灰黄褐10YR5/2	良好	外面平行叩き，緑色の自然釉。	SK71埋土	
39	須恵器	甕	－	－	－	灰色	黄灰2.5Y5/1	良好	外面平行叩き，内面ナデ。	SK66埋土	
40	土師質	内耳土器	－	－	－	微砂粒	褐7.5YR4/3	良	内面ナデ。	A-8グリッド	外面にすす付着。
56	土師質	羽口	－	－	－	長石・礫	橙2.5YR6/6・褐灰10YR5/1	普通	表面がなでられる。	SK61埋土	

番号	種別	器種	産地	時代	所見	出土位置	備考
41	知恵	甕	常滑	15-16C	焼成温度が高く，胎に気泡ふくれあり，内外共に降灰を認める。表面は無ていね。	SK66覆土	
42	知恵	甕	渥美	12C	輪積，平行叩きを丁寧に撫で調整にした表面と，叩きの痕跡のないナデ調整の表面を持つ口の立ちとがりに近い部位。	SK66埋土	
43	知恵	壺・甕	常滑	15-16C	輪積・ナデ調整，焼成温度が高くふくれあり，内外面共に降灰を認め，表面に焦げと火色がある。41と同一個体と推定される。	SK66埋土	
44	知恵	片口鉢	渥美	12C 末	内面にガラス質の自然釉が認められるが使用により薄らかになっている。高台部は欠が甚だしい。		割れ口摩滅。
45	知恵	壺・甕	渥美	12C	輪積・ナデ調整，表面は特に丁寧に撫でられる。	B-4グリッド	
46	知恵	壺・甕	常滑	15-16C	輪積・ナデ調整表面に火色が出て光沢あり。		
48	知恵	甕	渥美	12C	輪積，ナデ調整，「□乙□」の文字が書かれている。	A-8グリッド	体部外面にヘラ書。
48	土師	鍋	在地	12C	常陸地方のカワラケと同様に長石粒，石英粒，金雲母が顕著に認められる。輪積・ナデ調整。	SB58埋土	
49	瓶類	碗	肥前波佐見	18C	染付碗の底部を含む破片で，高台内に草体の最もくずれた銘款あり。	B-6グリッド	
50	陶器	皿	瀬戸・美濃	18C	灰釉を内面に掛けた皿の底部で，外面は無釉。	A-8グリッド	
51	陶器	碗	志戸呂	18C	鉄釉を施した碗の底部で，全面に施釉した後，漬けの為をふき取っている。	B-4グリッド	
52	陶器	皿	瀬戸・美濃	15C 末-16C 初	皿の縁部のみ灰釉を漬掛けした緑釉の皿。	A-7グリッド	
53	陶器	鉢	瀬戸・美濃	16C 末-17C 初	鉄絵に長石釉を掛けた志野大鉢で，高台内に同鉢ピンの痕跡あり。	A-9グリッド	

番号	種別	器種	長5mm	幅	厚5	重5 g	特徴	出土位置	備考
54	鉄	鉄滓	69	45	35	137.2	溶解した鉄分と砂質状の本体（砂質が）の融着と考えられる。	SK61埋土	
55	鉄	鉄滓	56	46	23	67.6	溶解した鉄分に若干の砂が付着している。	SK61埋土	

第４章　総括

１　遺跡の歴史的変遷

平安時代　今次調査では竪穴住居跡２軒が確認された。いずれも，全体を確認し得なかった。SI06 は調査区東端に位置し，住居跡の西壁を確認したのみで，出土遺物も認められなかった。SI07 は調査区の中央に位置し，ほぼ半分が調査区外に延びている。平面形は方形と考えられる。東壁外側に，白色粘土塊が認められたことから，これをカマドの一部と推定した。白色粘土塊の周囲は浅く掘りこまれており，棚状施設と推測した。柱穴は南壁に２基を確認した。床面はローム層を掘りこみ，隅をやや深く円形に中央を浅く掘りこみ，ローム・黒色土・白色粘土を埋めていた。中央が若干締まっている程度である。出土遺物は土師器坏・高台付坏・皿・蓋・甕，須恵器坏・壺・甕，鉄製品釘・鎌が出土した。土師器坏はロクロ整形，底部及び体部下端を回転ヘラ削り，内面はミガキのち黒色処理される。土師器坏（３）の底部はヘラ切り，土師器高台付坏（５）は糸切りのち回転ヘラ削りによる削り出し高台である。土師器甕は口縁部上位の屈曲が明瞭で，体部ヘラ削り調整される甕（16），ヘラナデ調整される甕（15）がある。いずれも出土遺物は破片で，埋積土中から出土であり，竪穴住居跡に伴うものとはいいがたいが，土師器坏・皿類に黒色処理が施され，土師器甕はいわゆる常陸型甕を主体としつつも，外面の調整には磨きが認められなかった。また，主体的ではないものの須恵器坏・甕が混じっている。これらの土器組成から本跡の時期は９世紀中葉から後葉と推測される。また，調査区内の竪穴住居跡以外の土坑やピットからわずかではあるが土師器坏・皿・甕，須恵器坏・高盤・甕などが出土しており，これらはいずれも９世紀代のものである。

石沢台遺跡は 2012 年に調査において５軒が調査され，３期，８世紀後半から９世紀中葉に細分されている。2012 年の調査と今次調査から本遺跡は８世紀後半から９世紀中葉にかけて営まれた小規模な集落と考えられ，今次調査の結果からその範囲は，台地中央にまで達したものの，台地西縁までには至っていなかったことが確認できた。

中世　今次調査の結果，中世と考えられるものに土坑 20 基，地下式坑２基，方形竪穴１基，溝２条（時期不明４条），ピット 130 基がある。土坑は調査区の中央A・B−3～８グリッドに位置している。調査区外に延びているものや，耕作により攪乱を受けているものがあり，全体を確認できるものはわずかであるが，おおむね平面形は長方形（SK55・56・64・60），長軸長が幅の２倍以上ある長方形（SK61・77・66・67・57），円形（SK62・63・71・72・70），不整形（SK69・65・76・73）に分類できるが，断面の形状，埋積土等その詳細を細分しても各個に特徴があり，それぞれをここでまとめ上げるのは難しく，目視的にその形状を分類するにとどめる。SK55 は平面形が長方形，東西 1.5m，南北 1.2m，深さ 70cm を測る。壁はやや内傾し，埋積土はローム塊を含んだ黒色土による埋め戻しと考えられる。墓坑と推定されるが，出土遺物がないため即断はできない。SK56・64 は深さが 10cm・25cm と浅くやや耕作土の影響を受けているため当初の大きさを推定することはできない。SK61・66・77・67・57 は，規模はおおむね全長２m 前後，幅 80 ～ 90cm を測り，黒褐色土で埋められる。SK61 から鉄滓が出土したものの，ほかの土坑からは何も出土しなかった。SK71・72 は径 1.6m の円形を呈する。埋積土は黒色土を主体とし，締まっている。いずれの土坑からも時代を特定できる遺物が出土しなかったが，埋積土や掘り込み面の層位から中世と判断した。SK58・68 は形状から地下式坑と判断した。SK58 はそのほとんどが調査区外に延びているが壁が内傾し，わずかであるが東側に突出する部分がある。SK68 は全体を確認できた数少ない遺構である。東西方向の長方形の掘り込みで東壁以

外は内傾している。南壁の西寄りに半円形の竪坑があり，緩い階段状に掘りこまれている。埋積土は底面直上に黒色土が堆積し，その上にロームの崩落土が認められた。このことから，本遺構には天井部が存在した可能性がある。遺物が出土しないため時期を推定することができない。SK75は調査区外に延び，掘り込みが13cmと浅いが，規模が東西2mを測ることから方形竪穴と推定する。SK76も東西2.3m，深さ28cm，調査区外に延びではいるが方形竪穴の可能性がある。溝はいずれも調査区を横断するように南北に通っている。SD10は調査区の東端に位置し，断面箱薬研状を呈する。東側にSD11が並行して通る。調査区東側には市道3002号線が南北に通り，市道3012号線と合わせて小字境となっている。SD10からは遺物は何も出土しなかったが，埋積土から時期は中世と考えられ，この溝は小字境が示すように区画溝の可能性がある。ピットは130基が確認された。特に調査区中央A・B−6・7グリッドに土坑と伴って集中している。規模による明確な分類は認められない。同規模のピットが並ぶようにも観察されるが，調査区が狭小なため建物を復元することができなかった。

土坑・地下式坑・方形竪穴・溝・ピット等の遺構の在り方から，本調査区内には中世の集落跡あるいは墓地が存在した可能性がある。しかし，1次の調査においては土坑墓群を確認しているが，今次調査では多数のピットが集中的に認められたことから，前回の調査区とは別な性格を持った遺構群の可能性がある。

中近世の出土遺物について　中近世の出土遺物は総数13点が出土し，その鑑定については山下守昭氏にお願いし，本文中の観察表に示した。その内訳は炻器渥美産が4点，常滑産が3点，陶器瀬戸・美濃産が3点，志戸呂産が1点，磁器肥前波佐見産が1点，在地産が1点である。時期は12世紀代のものが5点，15〜16世紀代のものが4点，16世紀末から17世紀初頭のものが1点，18世紀のものが3点である。炻器壺・甕（43）がSD06，在地産の土器鍋（48）の破片がSP85，炻器甕（42）がSI06の覆土より出土した。陶器皿（52）はA−7グリッド，炻器甕（47）・陶器皿（50）はA−8グリッド，陶器鉢（53）はA−9グリッド，炻器壺・甕（45）はB−4グリッド，磁器碗（49）はB−6グリッド，磁器碗（49）・陶器埦（51）・陶器皿（50）・陶器鉢（53）は表土中から出土した。遺構出土のものは覆土中からのものであるために，遺構が埋没途中で流れ込んだものと想定される。また，グリッド出土のものは，そのほとんどが遺構確認面からの出土のため，遺構の時期を特定するものではない。各遺構は調査区の土層断面からその掘り込み面は表土層の直下であることが観察されている。その表土中から出土した（49）・（50）・（51）がいずれも18世紀代のものであることから，遺構が近世以前のものと考えた根拠となった。中世の遺物は12世紀代の渥美産の炻器，15〜16世紀代の常滑産の炻器が少ない出土量の中でも比較的まとまって出土している。この土器組成は他の中世遺跡から出土する土器組成と大差ない出土状況を示している。だからといって，本遺跡の遺構がこの時期のものであることの証明とはならず，その性格も特定するものではない。しかし，このことが当遺跡には中世に人々の営みがあった証であることには間違いないであろう。

今次調査は道路改良という性格上その調査範囲が狭められており，遺跡全体の性格を把握することが困難であった。しかし，調査区周辺を注意して見渡すと，畑地の中に無縁墓地となっているが江戸後期から明治にかけての年号の記された墓石があり，また，無縁墓地に隣接する畑地には地下に遺構の存在を示唆する痕跡が表面に認められるなど周辺を精査すれば石沢台遺跡の範囲・性格をつかむことが可能であると考える。今次調査の成果により，当遺跡の性格の一端がうかがい知れることになったものと信じて本報告書のまとめとしたい。

参考文献

小川和博　2013『石沢台遺跡』常陸大宮市教育委員会

調査区全景（西から）

調査区中央部全景（東から）

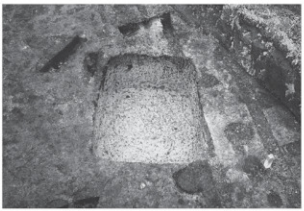
図版２

基本層序（南から）

SI07（南から）

SI07 掘方（南から）

SI07 遺物出土状況，鎌（南から）



SK55（東から）

SK55 土層断面（東から）

SK56（南から）

SK58（南東から）

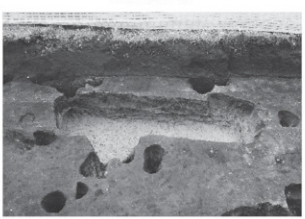
SK60・61・77（南から）

SK62・63（南から）

SK64（南から）

SK66（南から）

SK67（南から）



SK68（南から）

SK68 竪坑（北西から）

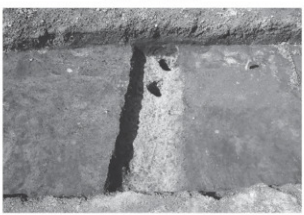
SK68 土層断面（東から）

図版 4

SK71・72（南から）

SK74・75（南から）

SD06（東から）

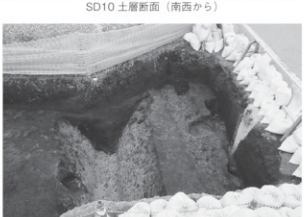


SD07（南から）

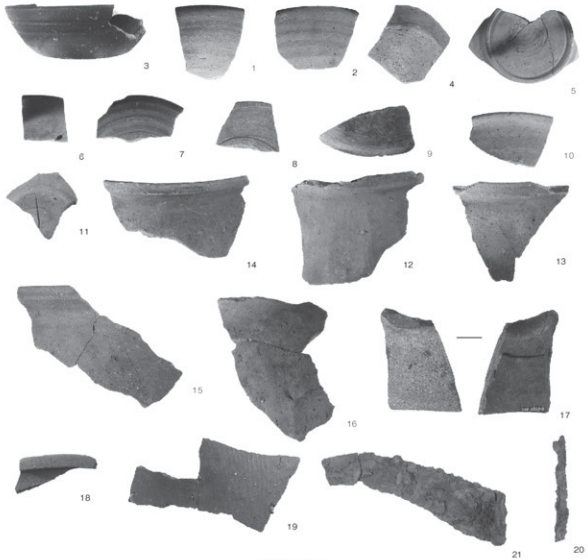
SD08（東から）

SD10 土層断面（南西から）

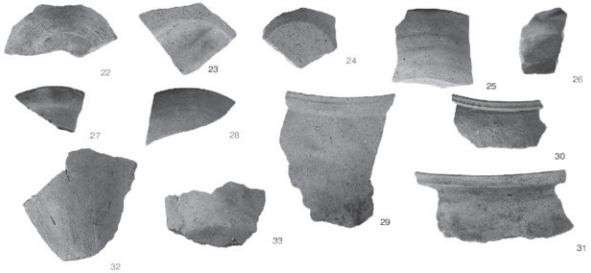
SD10・11・SI06（西から）



SD10・11・SI06（南から）

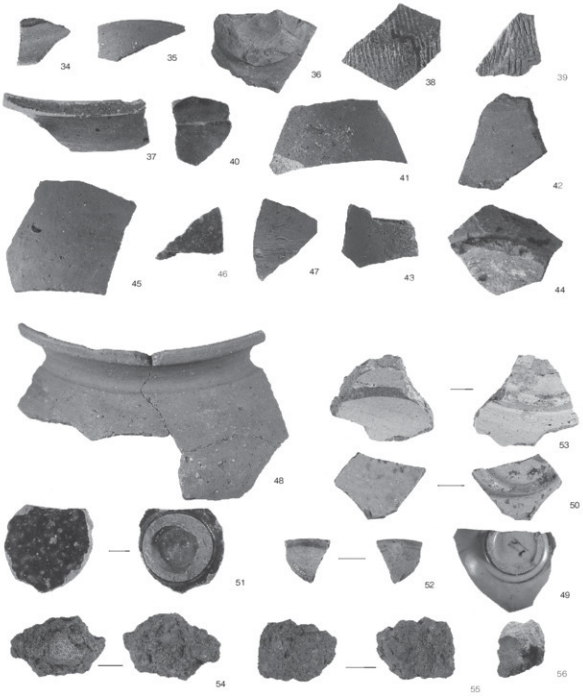


SI07出土遺物

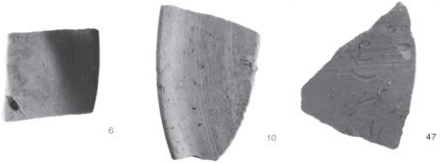


土坑・溝・ピット・遺構外出土遺物（1）

図版 6



土坑・溝・ピット・遺構外出土遺物(2)



墨書・刻書土器

報告書抄録

ふりがな	いしざわだいいせき に
書名	石沢台遺跡　Ⅱ
副書名	市道3012号線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	中林香澄，三輪孝幸
編集機関	(株)日本窯業史研究所　〒324-0611　栃木県那須郡那珂川町小砂3112　TEL0287-93-0711
発行機関	常陸大宮市教育委員会　〒319-2292　茨城県常陸大宮市中富町3135-6　TEL0295-52-1111
発行年月日	平成28年(西暦2016年)３月15日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
石沢台遺跡	茨城県 常陸大宮市 石沢字塙坂 1786-2	08225	大144	36° 32′ 16″	140° 24′ 38″	20150818 ～ 20150914	349.5 ㎡	道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石沢台遺跡	集落跡	平安	竪穴住居跡　２軒	土師器，須恵器，鉄製品	平安時代と中世の複合遺跡で有る。
		中世	方形竪穴　１基 地下式坑　２基 土坑　20基 ピット　130基 溝　２条	炻器，鉄滓	
		近世		陶磁器	
		時期不明	溝　４条		
要約	石沢台遺跡は台地上に位置し，調査区はそのほぼ中央を東西に貫く道路部分である。調査の結果，古代（平安）の集落跡と中世の土坑・ピット群を確認した。特に調査区の東端で確認した溝（SD10）はその規模から南北に通る区画溝と考えられ，その西側に土坑・ピット群が展開する。土坑・ピット群の中には地下式坑，方形竪穴が含まれている。明瞭な出土遺物は無かったものの，調査区の南方約60mには江戸後期から明治にかけての墓地があることなどから，これらの土坑は墓穴の可能性がある。		

本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用しています。

【紙　質】

表紙	レザック66	175kg
見返し	上質紙	57.5kg
扉・序・例言・目次・本文	クリームキンマリ	57.5kg
図版・抄録・奥付	マットコート	57.5kg

【印　刷】

オフセット印刷

印刷は黒

写真図版はモノトーン印刷

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第24集

石　沢　台　遺　跡　Ⅱ

市道3012号線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

発　行　平成28年（西暦2016年）３月15日

著　者　中林香澄・三輪孝幸

編　集　㈱日本窯業史研究所

栃木県那須郡那珂川町小砂3112

TEL 0287-93-0711

発　行　常陸大宮市教育委員会

茨城県常陸大宮市中富町3135－6

TEL 0295-52-1111

印　刷　株式会社 松井ピ・テ・オ・印刷

栃木県宇都宮市陽東5－9－21

TEL 028-662-2511